


ふりがな 氏名	あきなが なみ	都道府県	東京都	
	秋永 名美			
所属/肩書	株式会社リバネス 地域開発事業部、 東京大学大学院サステナビリティ学教育プログラム修了生			
私の ESD活動	科学技術の持続可能な発展と社会適用のための、 課題解決型実験教室の提供			

活動の概要（特に、取り組みの独創性、革新性、成果について説明してください）

大学院時代はサステナビリティ学教育プログラムにて、世界各国からの様々な分野の留学生と共に、エネルギー、震災復興、農業など幅広いテーマにおいて研究・ディスカッションを重ね、タイ等で行われる短期集中プログラムの開発にも携わりました。学部では純粋理学の実験系(物理学)にいたことから、科学技術がいかに社会に貢献できるかという強い疑問を持っています。今春、株式会社リバネスに入社。12年前に理工系の院生が立ち上げた弊社では、「科学技術の発展と地球貢献を実現する」という理念のもと、ありとあらゆるテーマの科学実験教室を行い、その対象は小中高大学生から教員・社会人にまで多岐に渡ります。

現在、サステナビリティ学を修めた者として私が最も力を入れて開発しているのは、企業や学習塾との連携のもと、遺伝子組み換えや再生可能エネルギー等を扱う先端科学実験に加え、その“科学技術と社会とのつながり”についてディスカッションさせる課題解決型プログラムです。

革新的な理由は3点あり、まず必ず実験を体験させること。そのうえで、そうした科学技術が社会に応用される際に、どのような課題を解決しステークホルダーと合意形成をしなければならないか、ディスカッションをさせることです。2点目は、自身の大学院での多様な研究者とのディスカッション経験を基盤に、それを初等・中等教育に落とし込み、多角的な視野をより若年層に与えていること。具体的には、まず中学生を対象とし、学年や性別に関わらず議論をさせています。3点目は、アカデミアだけではなくビジネスとしてこの活動を行っていることです。つまり、短期的な助成金頼りでもボランティアでもなく、企業に対して人材育成や新規事業創出の一貫で実験教室のノウハウを移転しているため、それによりいただく対価は活動の横展開、新規プログラム開発に活用され、この教育活動そのものが持続可能となっています。

・株式会社リバネス: <http://lne.st/>

・河合塾未来研究プログラム: <http://www.kawai-juku.ac.jp/event/e-detail.php?eventNum=0000027714>

今後のESDの発展のために、若者はどのような役割を担えますか？

今後の日本社会では、文系や理系など偏らずに、誰もが科学技術の仕組みを理解し、社会とのつながりを議論できるようにならなければなりません。若者は、異なる分野、世代、国家間の橋渡しの役割を担う必要があります。

これは、私自身が純粋理学と社会科学の両方の経験を持ち、そして世界各国の研究者とディスカッションを重ねたがゆえに感じることです。社会の問題を解決し貢献する形で科学技術が発展していくべきです。科学技術に携わるものはその成り立ちを市民にわかりやすく伝える責任があり、そして科学技術の恩恵にあずかる市民は誰も、日々の暮らしを支える科学技術の仕組みを理解しようとする責任があると考えます。何か破綻が起きてから問題を解決するのではなく、長期的な視野をもって、その科学技術の導入・実用化の際に生じるステークホルダーとの衝突・合意形成までできる人材を育てなくてはなりません。